

大谷地遺跡

—市道二子沢線改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—

2018. 3

盛岡市・盛岡市教育委員会

大谷地遺跡

—市道二子沢線改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—

2018. 3

盛岡市・盛岡市教育委員会

9. 調査体制－平成28・29年度－

〔調査主体〕	盛岡市教育委員会
	教育長 千葉 仁一
	教育部長 豊岡 勝敏
	教育次長 中野 玲子（～28年度）
	大倉 慎澄（29年度～）
〔調査総括〕	歴史文化課 遺跡の学び館
	課長兼館長 杉本 浩
	館長補佐 北田 牧子（～28年度）
	多田 秀明（29年度～）
〔調査主体〕	文化財副主幹 室野 秀文
	文化財副主幹 菊地 幸裕
	文化財主査 津嶋 知弘
	文化財主査 神原雄一郎
	文化財主査 花井 正香
	文化財主査 佐々木亮二（※調査・整理）
	文化財主事 鈴木 俊輝（※調査・整理）
	文化財調査員 今松 佑太（※調査）
	文化財調査員 及川 菜里
〔管理・学芸〕	主 任 川村 忠（29年度～）
	主 事 佐藤 美沙（～28年度）
	学芸調査員 樋下 理沙
	坂本 志野
	文化財調査員 日野杉調子
〔助 言〕	文化庁、岩手県教育委員会
〔協 力〕	発掘調査、資料整理、報告書編集にあたり、盛岡市建設部道路建設課、地権者、地元関係者の 方々、そして多くの作業員・県内外文化財関係者の方々より多大なる協力を得た。記して感謝 申し上げる。

10. 発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管してある。

目 次

例 言

目 次

挿図目次

写真図版目次

I 遺跡の環境	1
II 調査成果	4
III 総 括	35

挿 図 目 次

第1図 大谷地遺跡位置図	1
第2図 大谷地遺跡全体図	3
第3図 大谷地遺跡第2次調査区全体図	5
第4図 RE001竪穴跡、RF001焼土遺構	7
第5図 RD001~005土坑	8
第6図 RE001竪穴跡、RD004土坑出土遺物	9
第7図 遺物包含層土層図	10
第8図 遺物包含層出土石器 (1)	12
第9図 遺物包含層出土石器 (2)	13
第10図 遺物包含層出土石器 (3)	14
第11図 遺物包含層出土石器 (4)	15
第12図 遺物包含層出土石器 (5)	16
第13図 遺物包含層出土石器 (6)	17
第14図 遺物包含層出土石器 (7)	18
第15図 遺物包含層出土石器 (1)	19
第16図 遺物包含層出土石器 (2)	20
第17図 遺物包含層出土石器 (3)	21
第18図 遺物包含層出土石器 (4)	22
第19図 遺物包含層出土石器 (5)	23
第20図 遺物包含層出土石器 (6)	24
第21図 遺物包含層出土石器 (7)	25
第22図 RD501土坑、ピット	26
第23図 旧河道跡1・2・3 (1)	28
第24図 旧河道跡1・2・3 (2)	29
第25図 旧河道跡出土石器 (1)	30
第26図 旧河道跡出土石器 (2)	31
第27図 旧河道跡出土石器 (3)	32

第28図	旧河道跡出土石器 (1)	33
第29図	旧河道跡出土石器 (3)	34

写 真 図 版 目 次

第1図版	調査区全景（北から）、調査区全景（北西から）
第2図版	RE001竪穴跡、RD001土坑
第3図版	RD002土坑、RD501土坑・RD004土坑
第4図版	遺物包含層土層断面、遺物包含層出土状況1
第5図版	遺物包含層出土状況2、遺物包含層出土状況3
第6図版	旧河道跡①・②、旧河道跡③
第7図版	遺物包含層出土石器1(表)、遺物包含層出土石器1(裏)
第8図版	遺物包含層出土石器2(表)、遺物包含層出土石器2(裏)
第9図版	遺物包含層出土石器3(表)、遺物包含層出土石器3(裏)
第10図版	遺物包含層出土石器4、遺物包含層出土石器5
第11図版	遺物包含層出土石器6、遺物包含層出土石器7
第12図版	遺物包含層出土石器8、遺物包含層出土石器1
第13図版	遺物包含層出土石器2、遺物包含層出土石器3
第14図版	旧河道跡出土石器1(表)、旧河道跡出土石器1(裏)
第15図版	旧河道跡出土石器2(表)、旧河道跡出土石器2(裏)
第16図版	旧河道跡出土石器3、旧河道跡出土石器

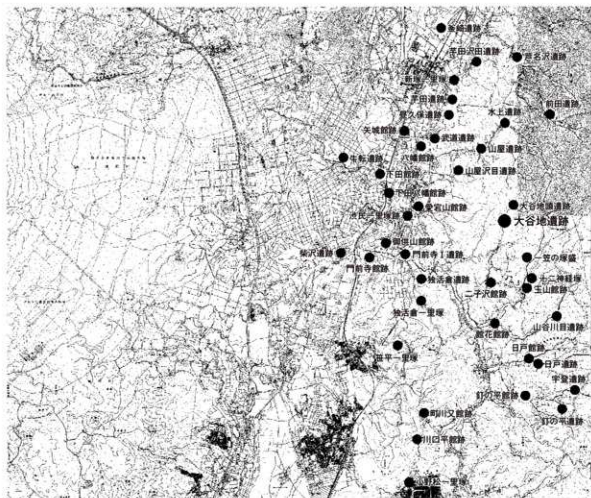
I 遺跡の環境

1. 地理的環境

遺跡の位置 大谷地遺跡は、盛岡市街地より北東約20kmの旧玉山区であった玉山宇大二子地内に所在する（第1図）。遺跡の範囲は南北220m、東西100mと推定され、現況は山林および牧草地である（第2図）。

地形・地質 盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西に岩手山（2,038m）、北東には姫神山（1,124m）を望む。中央に位置する北上平野には、東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡周辺の地質・地形に大きく影響を及ぼしている。

旧玉山区の面積の大部分を占める北上山地の地質は、その構造史より、北部北上帯、南部北上帯とその間に分布する根田茂帯の三つに大きく分けられる。かつて、北上山地の地質を南北に区分する境界断層帯は、「早池峰構造帯」と呼ばれていたが、近年の研究成果により、地帯区分の整理が進み、現在は南部北上帯の最下部を構成する複合岩類として区分されている。いずれの地帯も先新第三系から成る。旧玉山区の北上山地は、北部北上帯に属し、中生代中ごろのジュラ紀付加体によって占められている。



第1図 大谷地遺跡位置図 (1:50,000)

根田茂帯と北部北上帯の境界は、四十四田ダム西岸の小野松山付近より南東に伸びる断層によって区分されている。また、大谷地遺跡が位置する、姫神山麓の地質は花崗岩体から成っているが、これは前述した三地帯には属さない中生代の前期白亜紀に古生代の岩体を貫き固まった貫入岩であり、北上山地の表層の4分の1の面積を占める。大谷地遺跡が立地する谷底平野は、第四紀以降に堆積した土砂やテフラで構成されているが、その堆積土中には、岩体から崩落した花崗岩の転石が数多く含まれる。

2. 歴史的環境

周辺の遺跡 北上川東岸の北上山地から続く丘陵および低起伏山地は、県南部まで同様の地形が広がっており、数多くの遺跡が立地し、その多くが縄文時代の遺跡である。大谷地遺跡が所在する姫神山麓の周辺一帯の遺跡は、発掘調査が未実施の遺跡も多く、周辺の様相についてはあまりわかっていない。

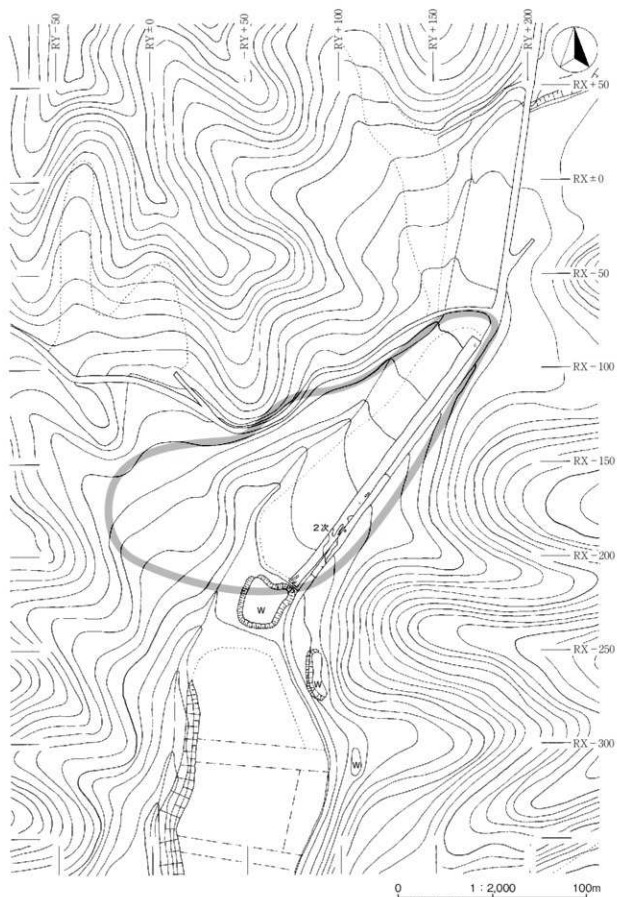
縄文時代 本遺跡の北には大二子Ⅰ・Ⅱ遺跡、大谷地頭遺跡があり、大谷地頭遺跡では周辺の開田工事の際に多くの縄文土器が出土したという話が伝わっている。南方には、日戸Ⅰ～Ⅴ遺跡、宇登Ⅰ・Ⅱ遺跡などがある。日戸Ⅰ・Ⅱ遺跡では、昭和30年に岩手大学が発掘調査を行っており、縄文時代早期の土器や、縄文時代中期～後期の土器や土偶などが出土している。また、平成7年には盛岡大学、平成17年には当時の玉山村教育委員会が発掘調査を行っており、縄文時代中期～後期の土器などが多数出土している。宇登Ⅰ遺跡では、平成11年に発掘調査が行われ、縄文時代晩期の竪穴建物跡や土器埋設遺構、土器捨て場などが確認され、多量の土器や石器、土偶や土面などの土製品等が出土している。

遺跡北西に位置する国道4号線済民バイパス建設工事の際には、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって昼久保Ⅴ遺跡や武道Ⅳ・Ⅴ遺跡が調査され、縄文時代に属する陥し穴状土坑が数基確認されており、縄文時代のある時期には狩猟場であったことがわかっている。

古代 周辺で古代の遺跡の調査事例は少ないが、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成9年と平成15年に調査を行なった芋田Ⅱ遺跡では、平安時代の竪穴建物跡37棟が確認され、墨書土器や耳皿などの官衙や城構に関連する遺物が出土している。また、馬場字芦名沢地内に所在する芦名沢Ⅰ遺跡では、製鉄に関係する遺物も出土している。

中世 戦国期の盛岡・玉山周辺は、南部氏、斯波氏の衝突が激しかった地域であるが、市内に数多く分布する城館跡の多くは、室町時代から戦国時代のもと考えられている。これらの城館跡は、丘陵や山頂など見晴らしい場所などに立地している。大谷地遺跡が位置する北上川東岸には、日戸館、玉山館、二子沢館など源頼朝の奥州合戦で功労のあった河村氏一族に関連する城館跡が数多く存在している。このうち、盛岡市の史跡に指定されている玉山館は、河村小三郎直秀を祖とした玉山氏が治めた城館であり、大館・小館と呼ばれる2つの曲輪を中心に構成されている。大館は東西約70m、南北約110mの規模で平面形は台形を呈している。北にある小館は東西約25m、南北約40mの規模で三角形の平面を呈し、大館との間は空堀によって区画されている。また、二つの曲輪の周囲には帯状の曲輪が配されている。

近世 市内中心部の城下の町並みの形成は、慶長2年(1597)の盛岡城の築城時から開始されている。それと同時に南部氏は街道の整備にも着手しており、奥州道中を中心として、慶長～寛文年間には城下から野田・宮古・遠野・雫石・鹿角へ放射状に延びる領内の脇街道も整備されている。大谷地遺跡の西側、北上川東岸沿いには、本街道である奥州道中が通っており、それに伴う一里塚が城下の鍛冶町を基点とし、南から上田・小野松・笹平・渋民・新塚と続いている。



第2図 大谷地遺跡全体図

II 調査成果

1. 調査経過

調査の経緯 平成27年度に盛岡市建設部道路建設課より、市道二子沢線の道路改良工事の事前協議があり、路線の一部が大谷地遺跡に該当することから、協議を受けて平成27年9月9日～11日にトレンチによる試掘調査（第1次調査）を行った。その結果、縄文時代の土坑や土器・石器が確認され、工事着手前の緊急発掘調査が必要となった。本調査は、工事主体者である盛岡市長と調査主体者の盛岡市教育委員会が協定書を締結し、予算の執行委任を受けて盛岡市教育委員会が行った。調査期間は平成28年8月18日～11月16日、平成29年10月3日～11月7日の二カ年にわたった。調査面積は1,032.6㎡である。

2. 遺構の検出状況

第2次調査区は遺跡内の最南端に位置し、北東から南西にかけての緩やかな斜面となっており、標高は310m前後である。遺構は黒褐色土層上面で検出した。

検出遺構 確認された遺構は、縄文時代の堅穴跡1棟、土坑5基、焼土遺構1基、平安時代の土坑1基、柱穴1穴、縄文時代早期末～後期の遺物包含層と田河道跡3条である。

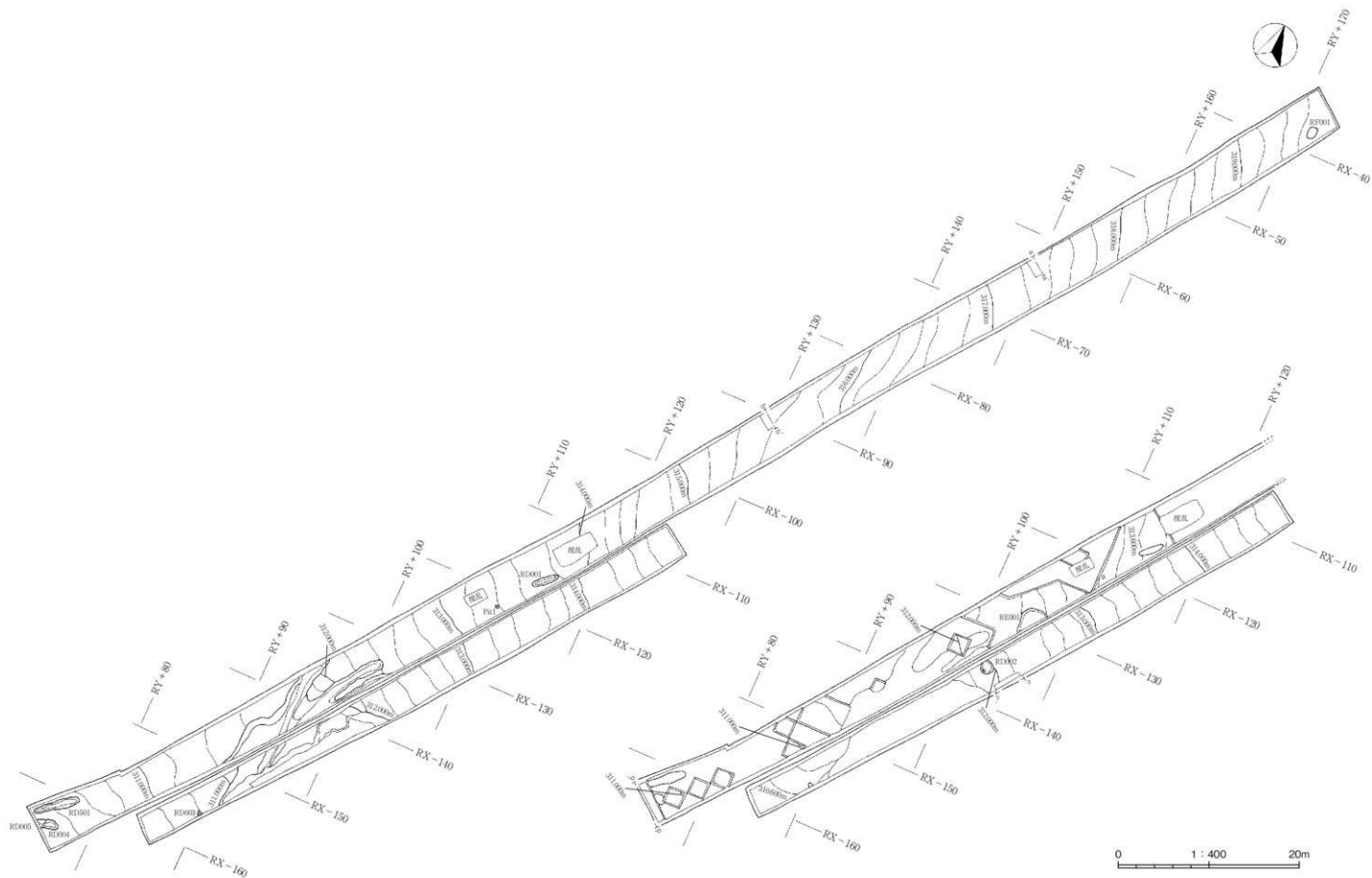
3. 縄文時代の遺構

RE 001 堅穴跡（第4図）

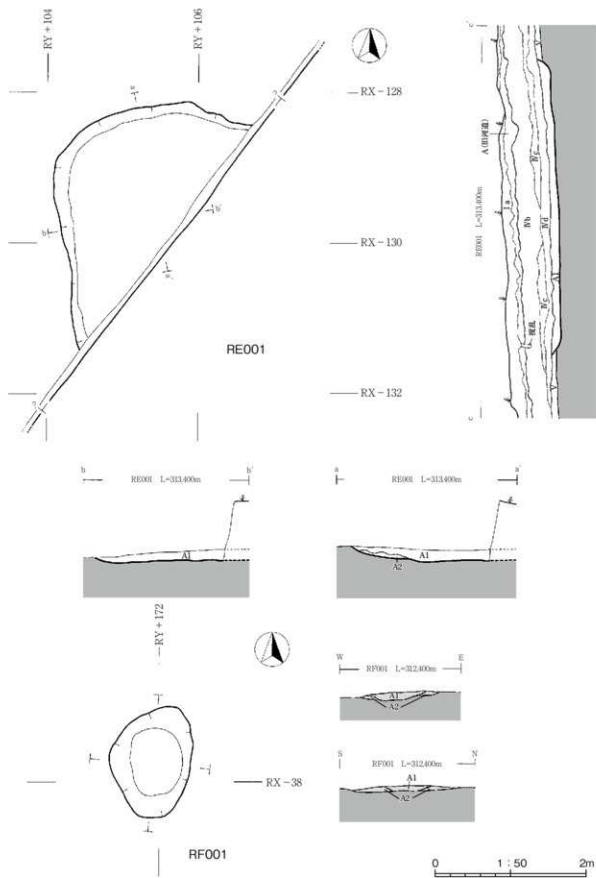
位置 調査区中央 **平面形** 楕円か **主軸方向** 不明 **重複関係** なし
規模 東西1.78 m以上×南北壁2.85 m以上 **掘込面** V層 **検出面** V層上面
埋土 暗褐色土を主体に褐色シルトを粒状に微量含む。
壁の状態 検出面から床面までの深さは0.18 mで、外傾して立ち上がる。
床の状態 床面はほぼ平坦である。柱穴は確認されなかった。
遺物（第6図1） 1は深鉢体部である。斜行縄文が施される。

RF 001 焼土（第4図）

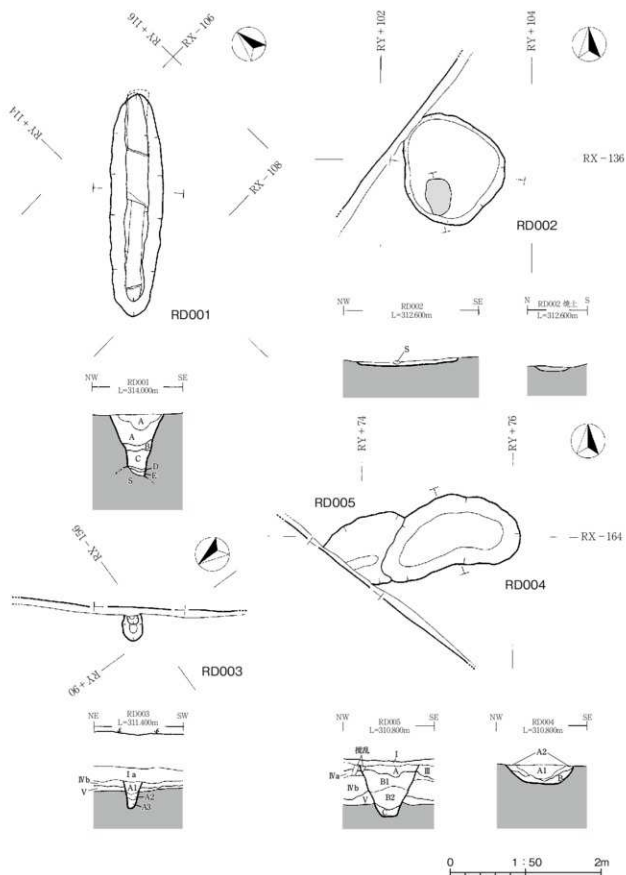
位置 調査区北 **平面形** 楕円 **重複関係** なし **掘込面** なし
検出面 III層上面 **規模** 長軸1.48 m、短軸1.08 m
埋土 黒褐色土を主体とし、粒状の焼土を含む。
壁の状態 皿状に外傾して立ち上がる。深さは0.11 mをはかる。
遺物 なし



第3図 大谷地遺跡第2次調査区全体図 (上：Ⅲ～Ⅳ層，下：Ⅴ層)



第4圖 RE001竪穴跡、RF001焼土



第5圖 RD001 ~ 005土坑

RD 001 土坑 (第5図)

位置 調査区中央 平面形 長楕円 重複関係 なし 掘込面 Ⅲ層
 検出面 Ⅳ層上面 規模 長軸上端 292 m・下端 280 m, 短軸上端 068 m・下端 028 m
 埋土 黒色土を主体とし、粒状の黄褐色シルト微量を含むA層と、褐色土を主体とする壁の崩落土と考えられるB～D層に大別される。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.78 mをはかる。 遺物 なし

RD 002 土坑 (第5図)

位置 調査区中央 平面形 不整形楕円 重複関係 なし 掘込面 V層
 検出面 黄褐色シルト層上面 規模 上端 1.34 m・下端 1.16 m
 埋土 褐色土を主体とし、粒状の黒色土を僅かに含む。
 壁の状態 皿状に立ち上がる。深さは0.08 mをはかる。 床の状態 底面南側の壁よりに火床面を検出した。
 遺物 なし

RD 003 土坑 (第5図)

位置 調査区南 平面形 不明 重複関係 なし 掘込面 削平
 検出面 Ⅳb層 規模 長軸0.46 m以上・下端0.24 m以上, 短軸上端0.36 m・下端0.08 m
 埋土 黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルト微量を含む。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.35 mをはかる。 遺物 なし

RD 004 土坑 (第5図)

位置 調査区西 平面形 楕円 重複関係 RD 005を切る 掘込面 削平
 検出面 Ⅲ層 規模 長軸上端 1.84 m・下端 1.44 m, 短軸上端 0.92 m・下端 0.48 m
 埋土 黒色土を主体とし、スコリア粒を少量含む。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.26 mをはかる。
 遺物 (第6図2・3) 2は口縁直下に横位平行沈線文を施す鉢の口縁部である。3は斜行縄文が施される鉢の体部である。

RD 005 土坑 (第5図)

位置 調査区南 平面形 長楕円か 重複関係 RD 004に切られる 掘込面 削平
 検出面 Ⅲ層 規模 長軸上端 1.02 m以上・下端 0.48 m以上, 短軸上端 0.88 m・下端 0.12 m
 埋土 黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色土を少量含む。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.68 mをはかる。 遺物 なし



第6図 RE001, RD004出土遺物

4. 遺物包含層

第2次調査区は、北東から南西に緩やかに傾斜しており、南側には旧河道が入り込んでいる。遺物は主に調査区中央より南側の地点で多く出土している。

I層—表土・耕作土。

II層—黒色土を主体とする層。

III層—黒褐色土を主体とし、スコリア粒をやや多く含む。

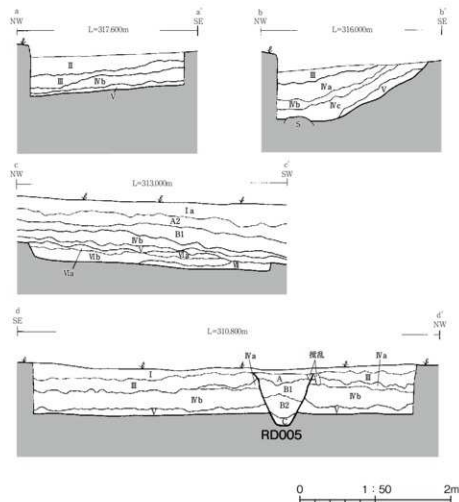
IV層—黒色土を主体とする層。混入土によりIVa～IVc層に細分される。

V層—黒褐色土層を主体とし、暗褐色土をやや多く含む層。

VI層—黄褐色土を主体とし、細礫をやや多く含む層。遺物は伴わない。

VII層—黄褐色土を主体とし、褐色土をやや多く含む粘質度の高い層。遺物は伴わない。

遺物は主にIII～V層から出土している。II～III層からは縄文時代後期～代晩期の遺物が、IV層は縄文時代前期初頭の遺物が、V層からは縄文時代早期末葉の遺物が多い傾向にある。



第7図 遺物包含層土層図

土器 (第8図1～第14図76)

縄文時代

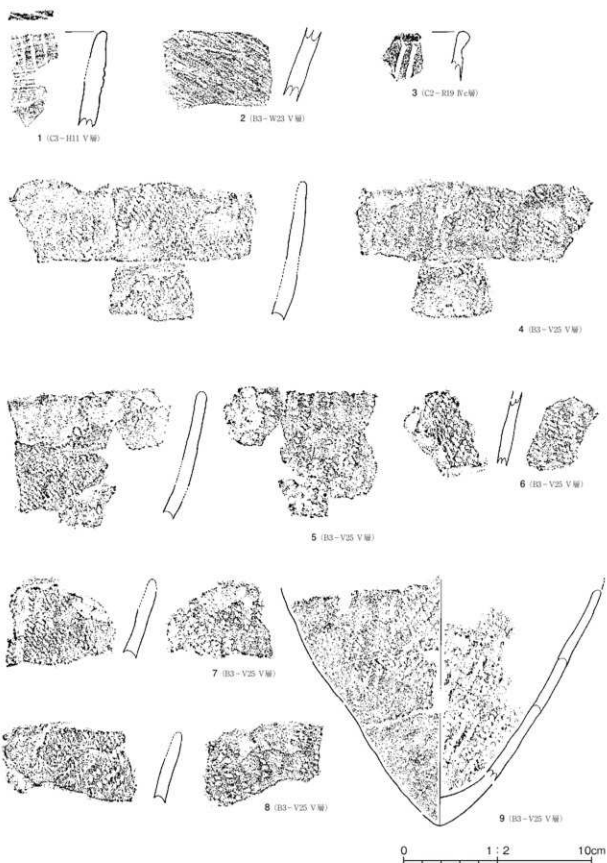
早期 1は口縁部に縦位の短沈線、その直下には横位の沈線文を施す深鉢口縁部である。2は尖底部付近の無文帯の体部片と考えられる。3は縦位の短沈線を施す深鉢口縁部である。4～31は器面の内外に縄文を施す所謂、表裏縄文の深鉢である。4～9は同一個体の体部から底部である。底部は尖底で内面は底部付近まで縄文が施される。体部は輪積み痕の部分で剝離している部分が多く、その断面は擬似口縁の形状を呈している。10～11は深鉢口縁部で10・11は口唇部に列点状の刺突が施される。12は口縁部下に補修孔と考えられる孔が穿たれている。14～31は表裏縄文の深鉢体部である。断面形状が擬似口縁を呈するものが多く確認される。32～51は斜行縄文が施される深鉢の体部である。一部、内面が剝離しているものは表裏縄文に属する可能性もあるが、それ以外は内面に縄文は認められない。胎土は4～31の表裏縄文に属するものと近似している。54～58は同一個体で、口唇部に刻目と口縁部文様帯に原体圧痕による波状文を施す深鉢である。体部には羽状縄文が施される。胎土には、前述の表裏縄文土器よりもやや多く繊維を含む。

前期初頭 59～68は胎土に繊維を多く含む繊維土器である。59は斜行縄文が施された深鉢の口縁～体部である。60は不整摺糸文を施す深鉢の体部である。61は横位の原体圧痕を施す深鉢の口縁部である。62は斜行縄文を施す深鉢の口縁部である。63・64は羽状縄文を施す深鉢の体部である。65は斜行縄文を施す深鉢の体部である。66は10段多条の斜行縄文を施す深鉢の体部である。67・68は組紐縄文を施す深鉢の体部である。

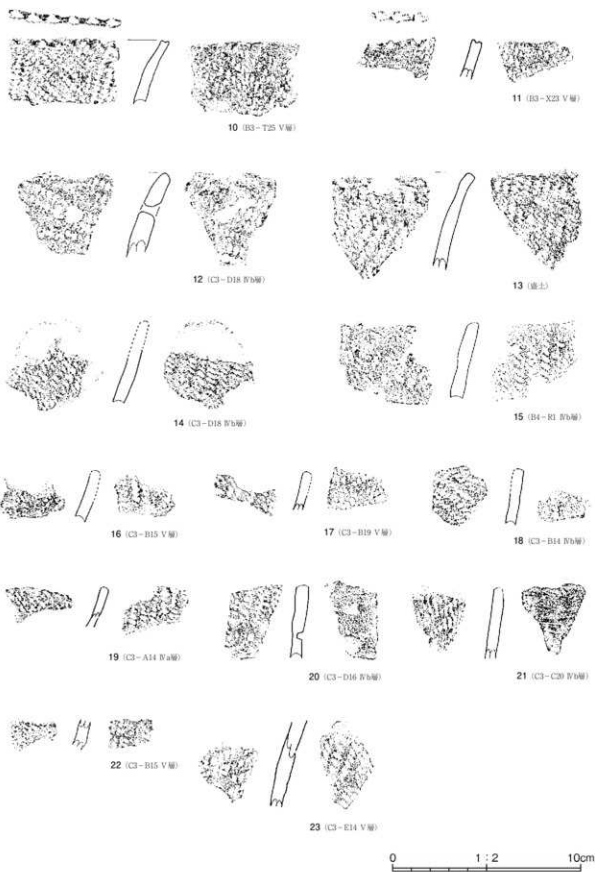
後期以降 69は横位多段の沈線文を施す深鉢の口縁部である。口縁部は波状を呈し、口唇部に刻目のある小突起が付く。70は横位沈線文と磨消縄文が施される深鉢の体部である。71は沈線による菱形入組文と三叉文が施される壺の肩部である。72は隆沈線による工字文風の文様が施される鉢の体部である。73・74は横位沈線文が施される鉢の体部である。75・76は斜行縄文が施される深鉢の体部である。

石器 (第15図77～第21図106)

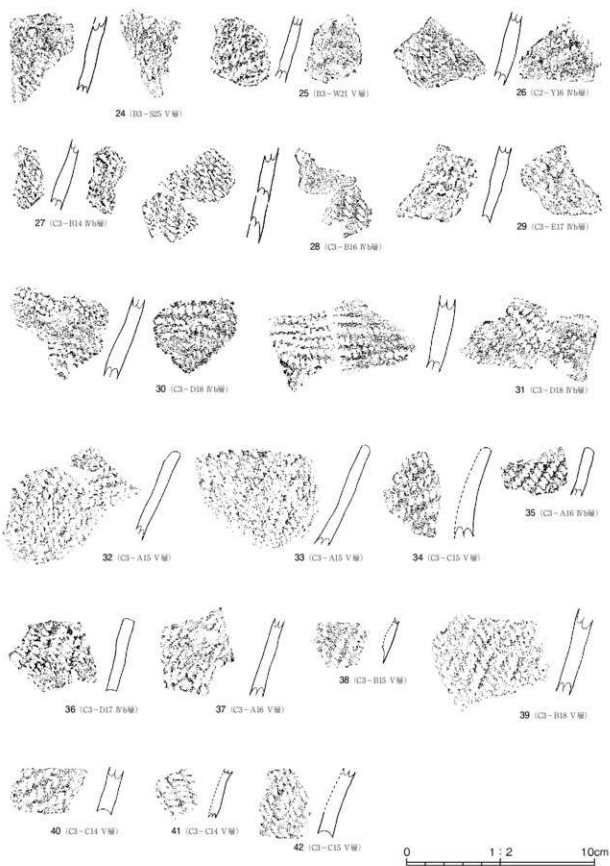
77・78は平基無茎の石鏃である。79は抉りの浅い凹基無茎の石簇である。剥片の周縁のみに調整を施している。80～83は削器である。81は背面に自然面を残し、背面右側縁に調整が施される。82・83は背面両側縁に調整を施す。84は背面左側縁に調整を施す搔器である。背面右側縁下部を欠損している。85は背面に自然面を残す石筥である。86～88は両面調整石器である。89は小型の磨製石斧である。90は石剣の未完成品である。両面側縁および上端部に調整が施され、下端部は欠損している。91～105は敲打磨石である。101・102・103以外は1/2以上欠損している。断面は三角形ないし不整四角形の形状を呈し、ほとんどのものは側縁1面に使用による摩滅痕が残されている。96・102・103は摩滅痕が2面確認できる。また、102・103は側面に敲打痕が残っている。106は敲打痕がある磨石である。



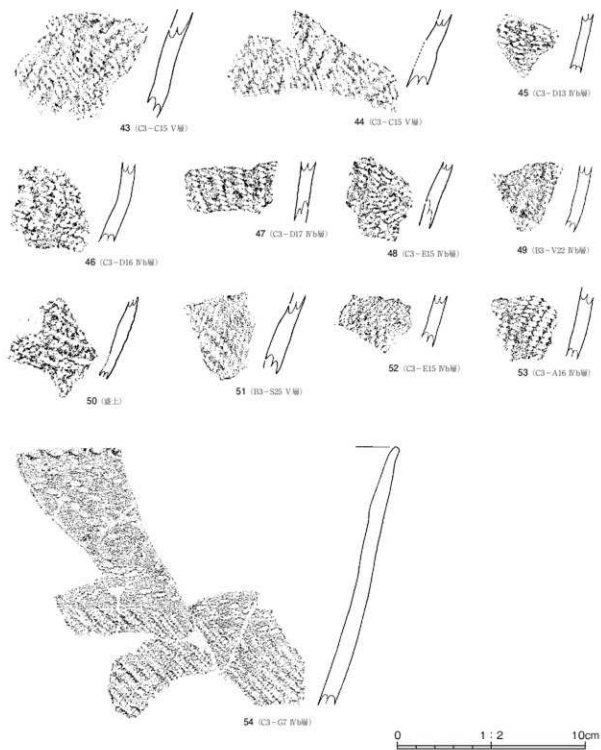
第8圖 遺物包含層出土土器 (1)



第9圖 遺物包含層出土土器 (2)



第10図 遺物包含層出土器(3)



第 11 図 遺物包含層出土土器 (4)



55 (C3-G7 B16B)



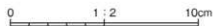
56 (C3-G7 B16B)



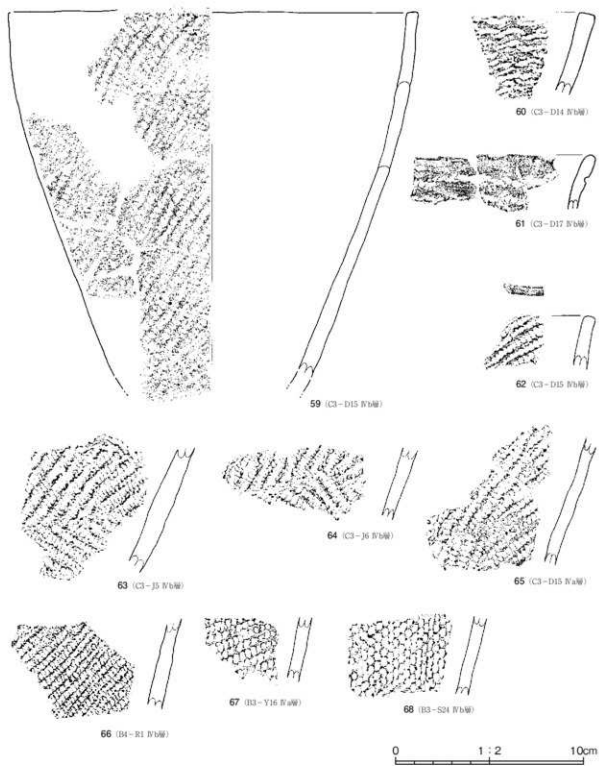
57 (C3-G7 B16B)



58 (C3-G7 B16B)



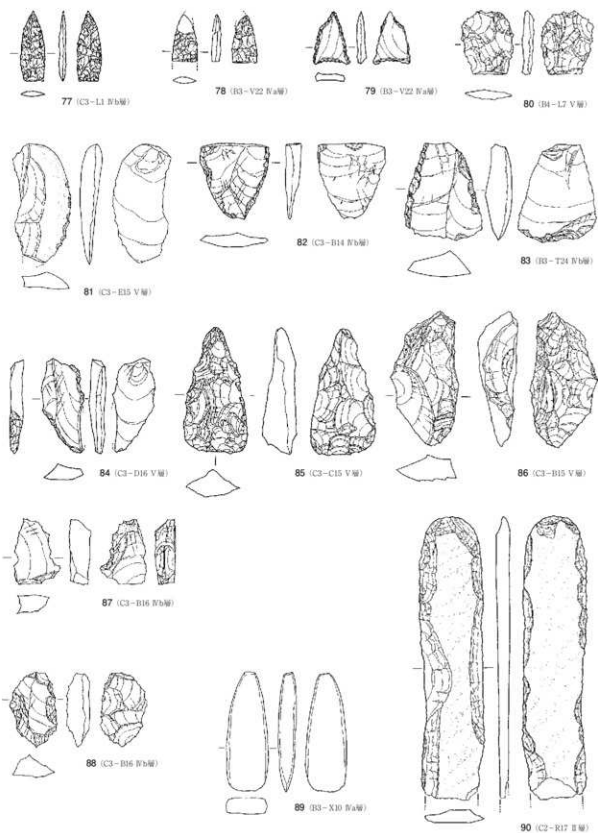
第 12 図 遺物包含層出土器 (5)



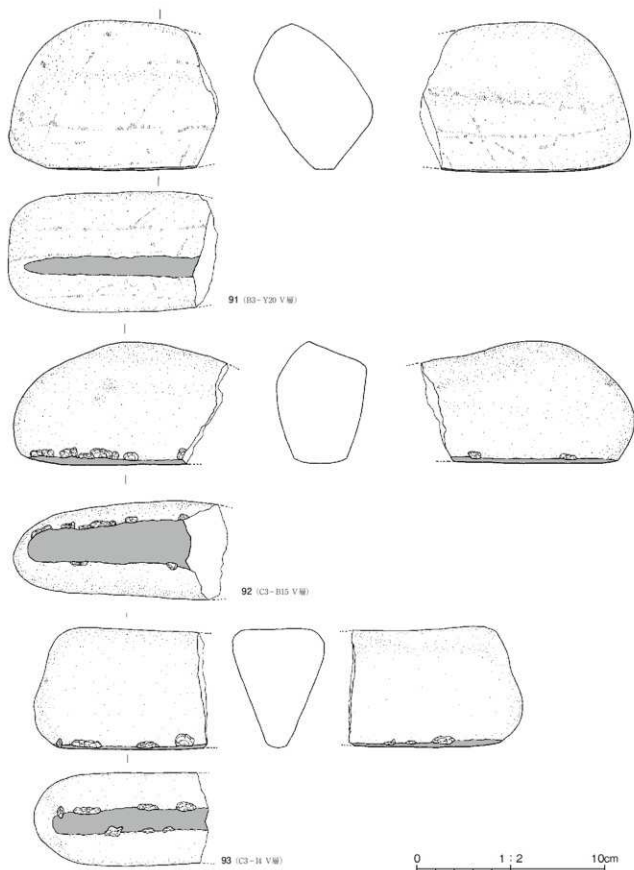
第13図 遺物包含層出土器(6)



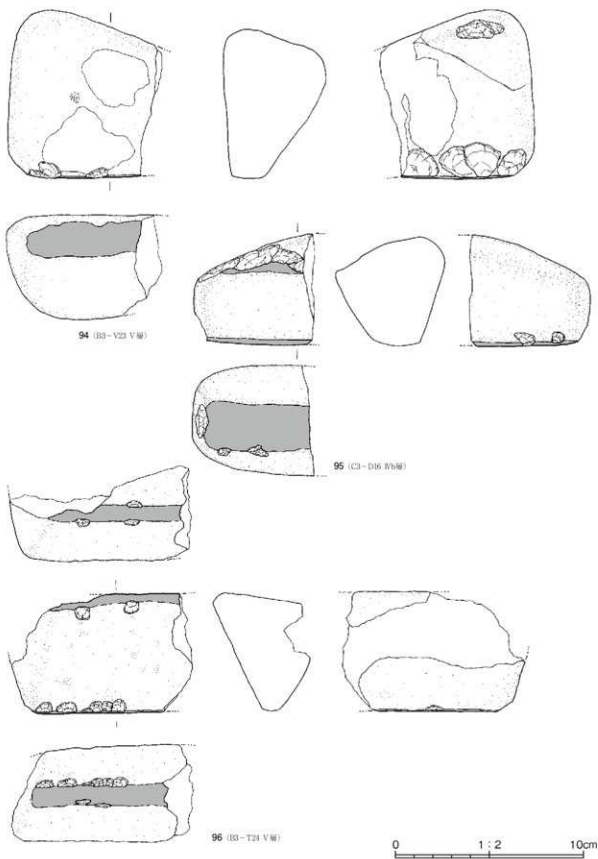
第 14 図 遺物包含層出土土器 (7)



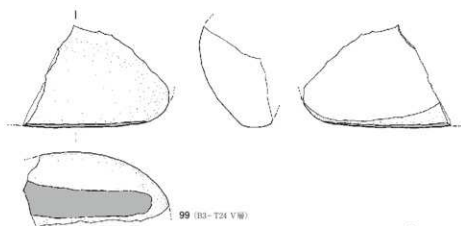
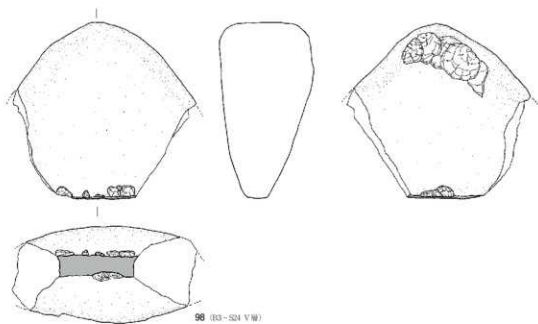
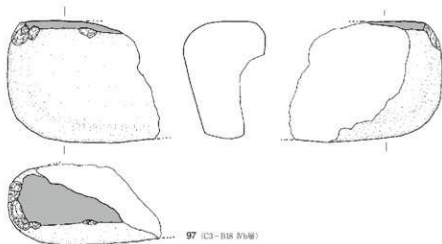
第15図 遺物包含層出土石器(1)



第16図 遺物包含層出土石器(2)

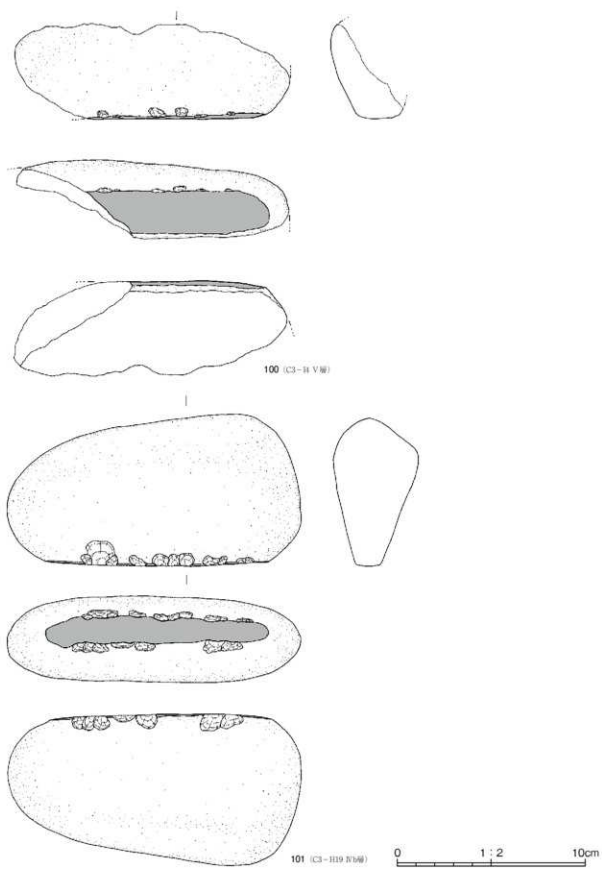


第 17 図 遺物包含層出土石器 (3)

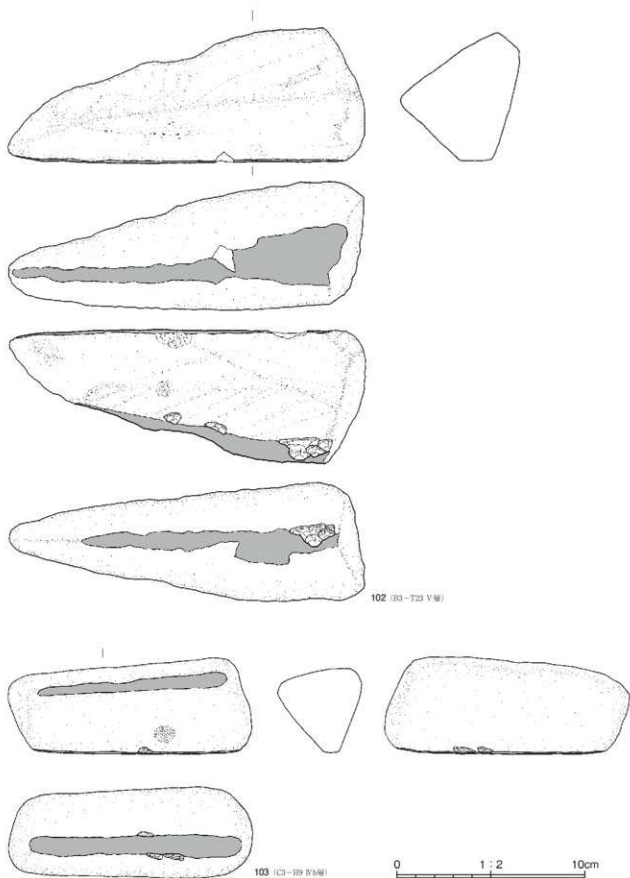


0 1:2 10cm

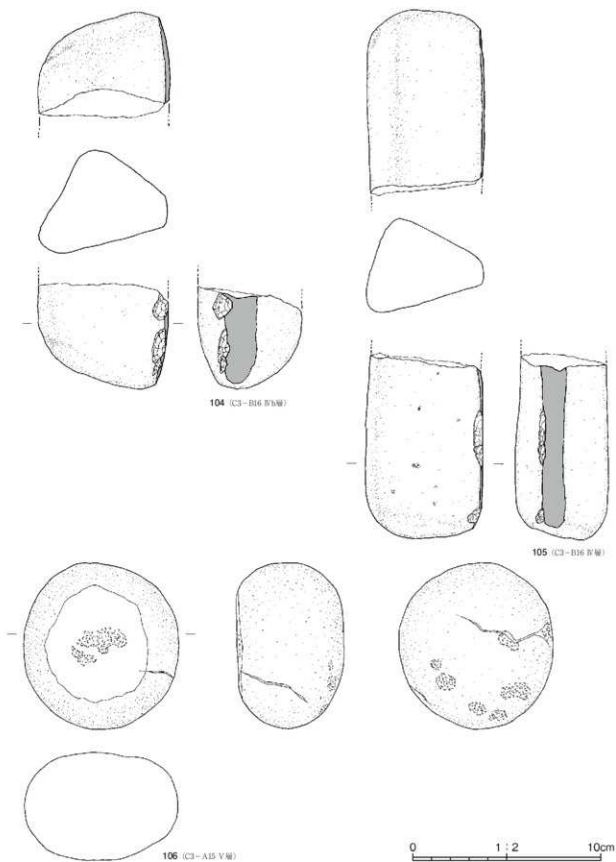
第18図 遺物包含層出土石器(4)



第 19 図 遺物包含層出土石器 (5)



第20図 遺物包含層出土石器 (6)



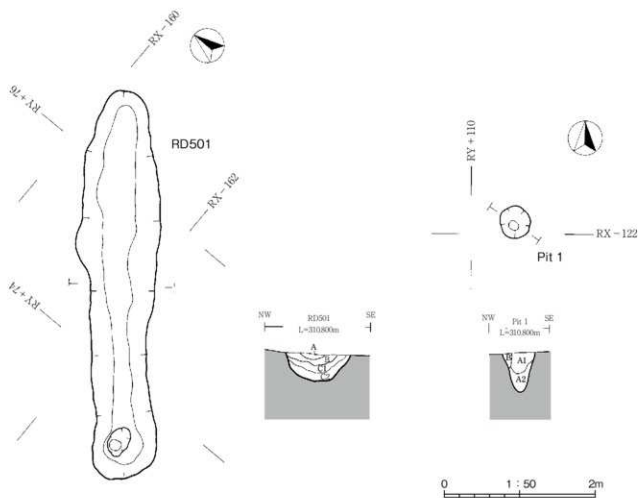
第 21 図 遺物包含層出土石器 (7)

5. 平安時代の遺構

RD 501 土坑 (第22図)

位置 調査区南 平面形 長楕円 重複関係 なし 掘込面 削平
 検出面 III層 規模 長軸上端 5.08 m・下端 4.72 m, 短軸上端 0.86 m・下端 0.34 m
 埋土 黒色～黒褐色土を主体とし, 混入物によりA～C層に大別される。とくにB層は, 灰白色の粉状バミスをよく含んでいる。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.36 mをはかる。 遺物 なし

ピット (第22図) 第2次調査区内では1口のピットが検出されている。埋土は, 黒褐色土が主体で, 灰白色の粉状バミスを少量含む。深さは0.52mをはかる。



第22図 RD 501 土坑, ピット

6. 旧河道1・2・3

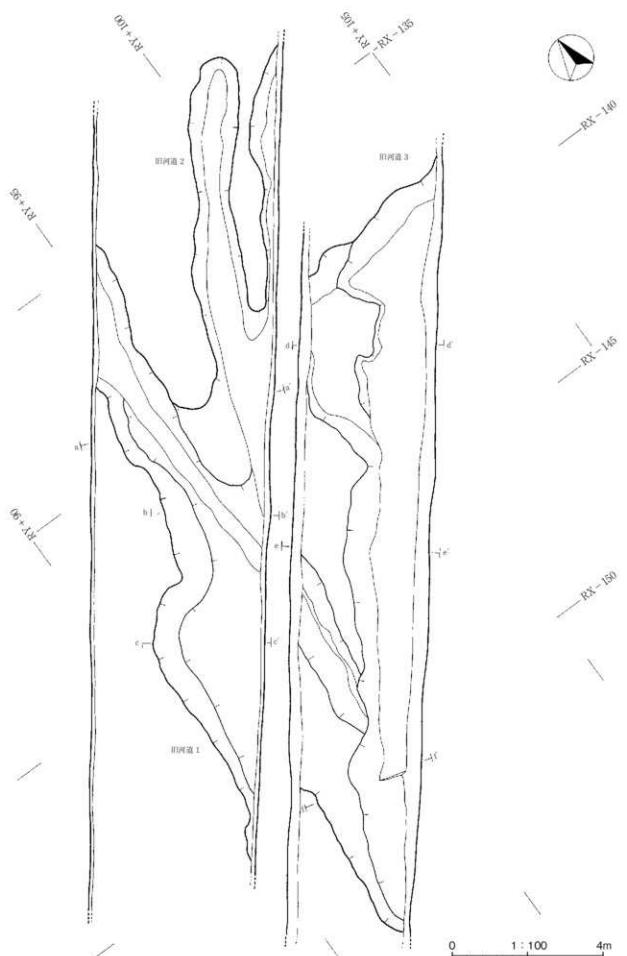
- 位置** 旧河道跡は、調査区の南よりに位置している。現在でも調査区東側には、山裾を通して幅約0.5～1mの小さな沢が流れており、今回確認した旧河道跡の現在の姿がこの沢であると考えられる。河道は北から南へ流れ、幾筋もの流路が集まり最終的に大きな河道になったものと思われる。
- 規模** 今回確認された流路の最大の長さは23.4mをはかり、その最大幅は7mを越える。深さは浅いところで0.5mほどであるが、南に下がると深くなり、調査区東壁付近で1mを超える。湧水のため、それ以上の深度を精査するに至らなかったが、河道の壁の傾斜から考えると、2mを越える可能性がある。
- 埋土** 埋土はA～G層に大別している。
- A層—黒色土を主体とし、スコリア粒を多く含む
 - B層—黒褐色土を主体とし、層状の砂を多く含む。
 - C層—黒色土を主体とし、粒状の黒褐色土を少量含み、硬く締まる。
 - D層—黒色土を主体とし、灰白色の粉状パミスが多く含まれる。
 - E層—黒褐色土を主体とし、粒～塊状の黄褐色土をやや多く含む。
 - F層—黒色土を主体とし、塊状の黄褐色土を多く含む。
 - G層—黒色土を主体とし、粒状の黒褐色土を少量含む。
- このうちA・B層は広範囲に広がり、C層以下の埋土を切るように堆積し、下部には硬化面も認められた。D1層には灰白色火山灰土が多量に含まれていた。F層には周辺の地山に含まれる黄褐色土が多く含まれている。遺物はF～G層から主に出土している。
- 壁の状態** 旧河道跡の壁は、浅い場所では緩やかに立ち上がるが、調査区東側では急激に落ち込み、深さを増している。

土器 (第25～27図)

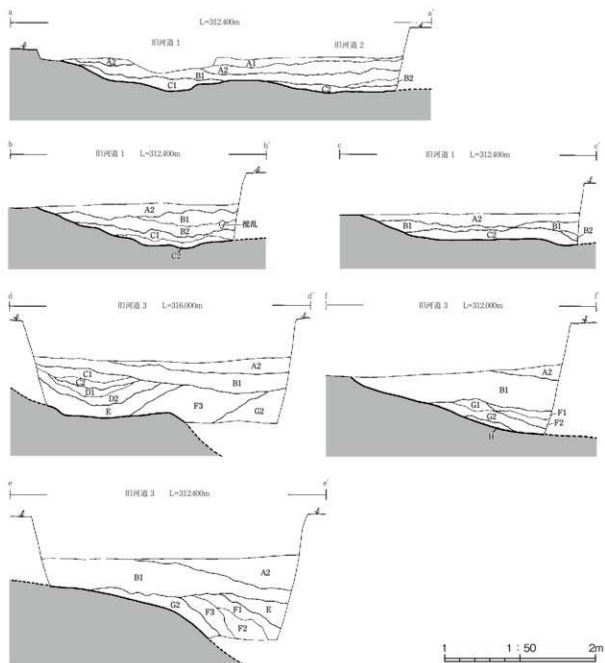
早期末～前期初頭 1は深鉢体部の無文部分である。2～20は内外面に縄文を施す所謂、表裏縄文土器である。2は口縁部で、口唇部に列点状の刺突を施す。3～20は深鉢体部である。3～8は、断面形状が擬似口縁を呈する。5～11、19の下部の断面形状は、前述の擬似口縁との接合面とみられ、凹状に剥離している。21～27は外面に縄文を施す深鉢体部で、2～20と外面の地文や胎土が類似しているため同時期のものと考えられるが、内面に縄文の施文は見られない。28～30は外面に縄文を施す深鉢で胎土に砂を多く含む。28は口縁部で、口唇部に縄文を施す。29、30は体部である。29は地文帯の上部に無文帯を有する。

後期以降 31～33は深鉢口縁部で、胎土に砂を多く含む。31、33は波状口縁を呈する。31、32は沈線と磨消縄文を施し、32は一部沈線間に無文帯を有する。33は上部に弧状および曲線状の沈線間に縄文を施す。34、35は鉢ないし壺と考えられる体部である。34は直線状の沈線と磨消縄文、35は直線及び鋭角的に引かれた沈線と磨消縄文を施し、一部無文帯を有する。36～40は外面に縄文を施す深鉢である。36は口縁部、37～40は体部で、胎土に砂を多く含む。41は底面に網代痕が見られる深鉢の体部～底部である。

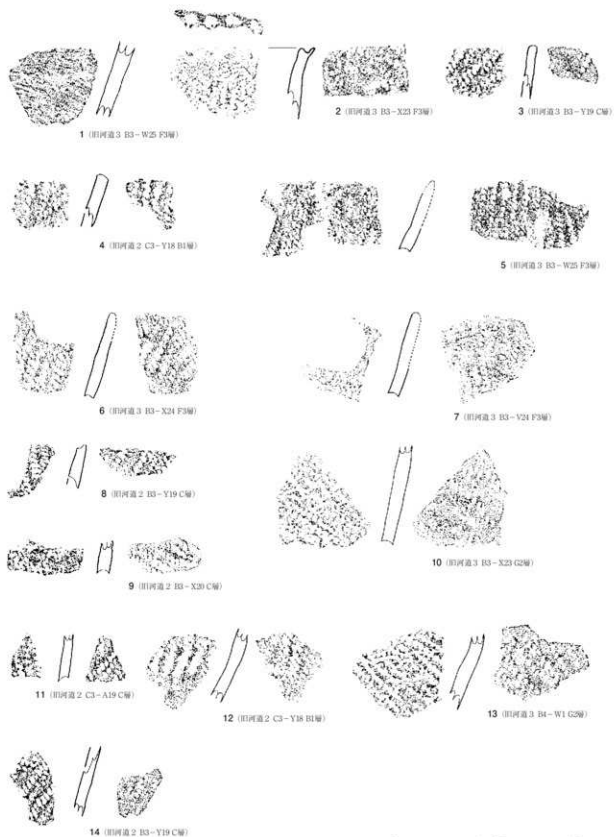
石器 (第28・29図) 42は縦刃の石匙である。押圧剥離によりつまみ部を作り出しており、腹面の一部に刃部調整剥離を施す。機能部は欠損している。43、44は削器である。43は背面に入念な押圧剥離を施す。44は片面のみ調整を施す。45は腹面両側に調整を施す片面調整石器である。46は両面調整石器で背面腹面ともに片側のみ調整が認められる。47～49は敲打磨石で47は完形、48、49は欠損している。いずれも一辺に磨面を持ち、敲打による剥離痕が見られる。



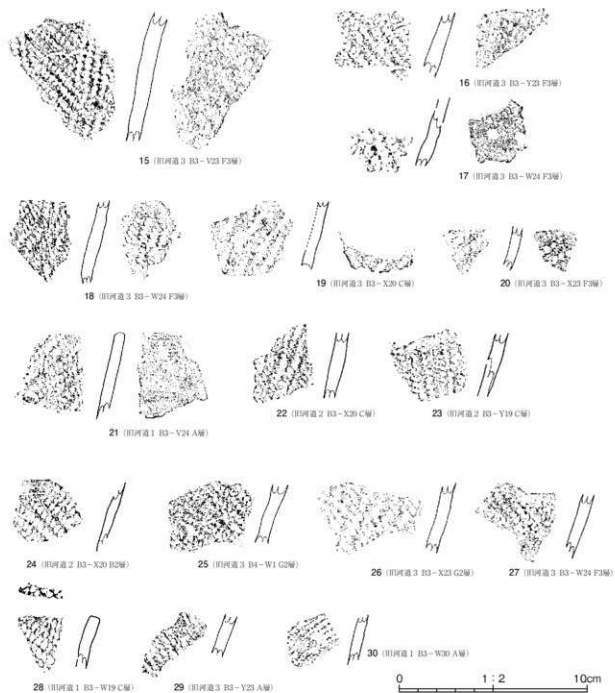
第23图 旧河道1・2・3 (1)



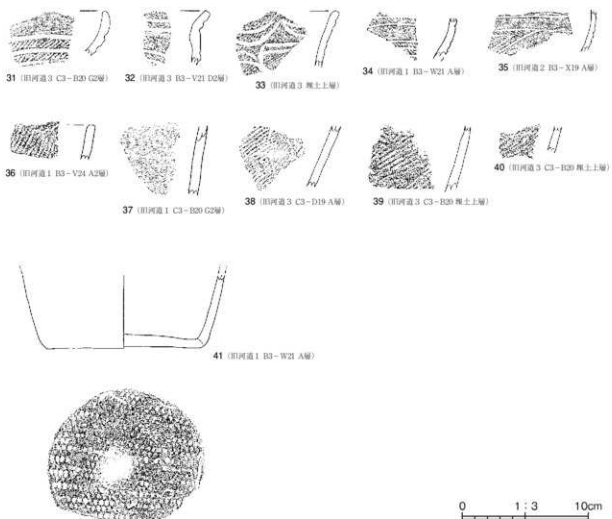
第24图 旧河道1·2·3(2)



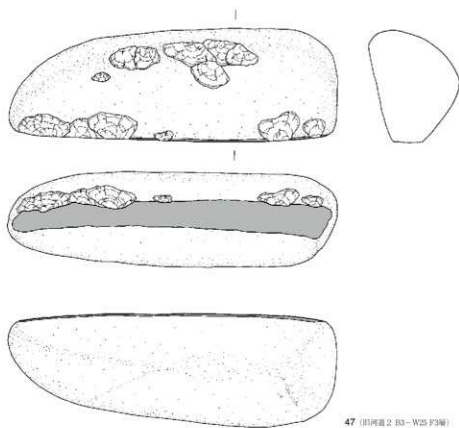
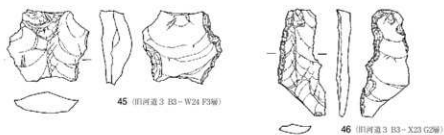
第25圖 旧河道跡出土土器(1)



第26图 旧河道跡出土土器(2)

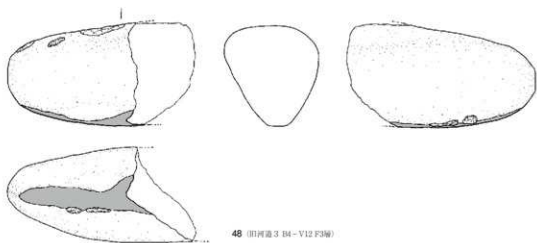


第27圖 旧河道跡出土土器(3)

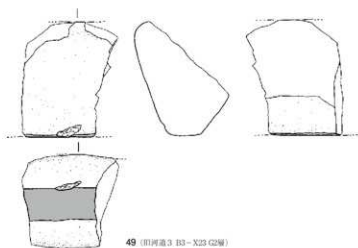


0 1:2 10cm

第28圖 旧河道跡出土石器(1)



48 (旧河道3 B4-V12 F3層)



49 (旧河道3 B3-X23 G2層)



第29圖 旧河道跡出土石器(2)

Ⅲ 総括

検出遺構 平成28・29年度の二か年に渡って行われた、第2次調査で確認された遺構等は、縄文時代早期末の堅穴跡1棟、土坑1基、縄文時代後期以降の焼土1基、土坑4基、平安時代の土坑1基、縄文時代早期末～晩期の遺物包含層、旧河道跡3箇所である。

調査区中央付近で検出した堅穴跡は、遺物包含層のV層を掘り込んでおり、周辺からは縄文時代早期末葉の表裏縄文土器が出土している。また、堅穴跡中からも1点のみであるが、繊維を含まない斜行縄文を施す薄手の深鉢体部片が出土している。このことから、この堅穴跡も早期末葉に属するものであると推定される。また、RD002土坑もV層中で検出しており、堅穴跡と同様の時期が考えられる。

RD001・003～005土坑は遺物包含層のⅢ～Ⅳ層中で検出している。Ⅱ～Ⅲ層中より縄文時代後期～晩期の土器が出土していることから、それ以降の時期に属するものと思われる。

RD005土坑は、埋土中に灰白色の粉状パミスが堆積していた。詳細な分析は行っていないが、これまでの調査事例からすると、十和田a火山灰の可能性が高く、平安時代以降に属するものと考えられる。

旧河道跡 旧河道跡の最終堆積層（A層）は、縄文時代晩期の遺物が含まれるⅡ層以下を下刻し堆積していた。また、旧河道3のD層には灰白色火山灰が含まれている。このことからD層から上層は、平安時代以降に堆積したものと推測される。大谷地遺跡は山裾の緩斜面上に立地しており、現在も東側を流れる沢が存在する。今回、確認された河道跡は、大雨などの際に山肌を流れる雨水が集まって、一時的な流路ができる現象を長い年月に渡って繰り返された結果、形成されたものと思われる。

出土遺物 今回の調査では、縄文時代早期から晩期までの土器が出土している。第8図1は、口縁部に縦位の平行沈線文を密に施し、多条の横位並行沈線文で区切っている。これらの特徴などから、大新町遺跡や薬師社胎盤遺跡などで出土している、早期中葉の沈線貝殻文系の薬師社胎盤Ⅱ群（大新町C式）に相当するものと考えられる。

表裏縄文 遺物包含層中から最も多く出土している土器は、器面の内外に縄文を施す、表裏縄文土器である。盛岡市内では、大新町遺跡や大館町遺跡などで出土しているが、その遺跡数は少なく、出土量も少量である。主にⅣb～Ⅴ層中からの出土が多く、その遺物包含層を削って堆積した旧河道跡の中からも出土している。内外面に施される縄文は単節の斜行縄文がその多くを占め、他の事例で報告されているような原体押圧、沈線文、羽状縄文などの文様は確認されていない。また、口縁部の点数が少ないため、傾向としては捉えがたいが、平縁で口唇部に棒状工具による刺突列を施すものが多い（第9図10・11、第25図2）。底部の出土も少ないが、同一個体がまとめて出土した第8図4～9などを見ると尖底を呈し、底部付近まで縄文が施されている。胎土は緻密で焼成良好であり、ほとんど繊維を含まないものが多い。土器の接合面は丸みのある擬似口縁状を呈している。また、内面に縄文を施さない土器群（第10図32～第11図53、第26図22～30）も、表裏縄文と同様の胎土、接合面の様相を呈しており、同じ土器群に含まれるものと考えられる。以上のような特徴を見ていくと、これらの土器群は早期末葉の赤御堂式並行と考えられる。赤御堂式はさらに古段階、中段階、新段階に分けられる報告（村木1982、工藤1989）が、これまでになされている。このうち古段階は、早期末葉のムシリI式的要素を残すものとされ、本遺跡出土のものとは様相が異なる。斜行縄文のみを内外面に施す土器群は、中段階～新段階のどちらにも見受けられ、本遺跡出土の土器群もこのいずれかに含まれるものと考えられる。

第11図54～第12図58は同一個体で、その胎土に繊維は含むものの、後述の前期初頭の繊維土器とは異なり、繊維の混入度は少なく焼成が良好である。また、口唇部に指頭圧痕、口縁部文様帯に原体圧痕による波状文を、体部には羽状縄文が施されるなど、文様も前期初頭の繊維土器とは様相が異な

る。今回の調査では出土例が少なく、この1点の資料のみで断定するのは難しいが、赤御堂式とも前期初頭の繊維土器群とも異なる胎土・文様等から、本報告では両者の間に位置する早稲田5型式並行とし、今後の資料の増加に期待したい。

前期初頭 第13図59～68は、体部に斜行縄文、羽状縄文、組紐縄文などが施される。また、胎土に繊維を多く含んでいる。前期初頭の繊維土器に相当すると考えられる。

後期～晩期 縄文時代後期～晩期に属する土器も、点数は少ないが出土している。第14図69・70、第27図31～35は横位多段の沈線文を主体し、後期前葉に位置づけられるものと考えられる。第14図71は大洞B式の甃で、第14図72は大洞A式に相当するものと考えられる。

大谷地遺跡はこれまで調査事例が無く、今回の調査が初めてであった。その結果、縄文時代早期末葉の表裏縄文土器の資料を得ることができた。残念ながら、それらの土器群に伴う堅穴建物跡などの明確な居住地を示す遺構は確認できなかった。しかし、遺物包含層や旧河道跡から出土した表裏縄文土器の器面は、摩滅しているものは殆どないことから、今回の調査区よりさほど離れていない場所に居住地が存在するものと推測される。また、盛岡周辺での縄文時代早期末葉の表裏縄文の出土事例は少なく、岩手県内でも関谷洞穴や小松洞穴、崎山弁天遺跡などでまとまった資料が報告されているが、遺跡数としては他の時期に比べると少ない。今回の調査で出土した土器群は、県内の事例や八戸地域の事例と比べると文様のバラエティは少なく、斜行縄文がその殆どを占める。数は少ないが、ほかの市内出土の表裏縄文も同様の傾向を示している。これが盛岡周辺の特徴を示しているのか、出土数が少ないことによる資料の偏りなのかは、さらなる事例の増加を待たねば判断できないが、今回の調査で得た資料は、盛岡周辺の早期末葉の土器編年を考える上で貴重な成果となった。

【引用・参考文献】

- 草間俊一ほか 1974「崎山弁天遺跡」大畑町教育委員会
- 村木 淳 1982「長七谷遺跡発掘調査報告書」八戸市埋蔵文化財調査報告書第8集 八戸市教育委員会
- 工藤竹久 1988「赤御堂遺跡」八戸市埋蔵文化財調査報告書第33集 八戸市教育委員会
- 熊谷常正ほか 1989「東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について」第4回縄文文化検討会シンポジウム
- 相原淳一 1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年—仙台湾周辺に分層発掘資料を中心に—」考古学雑誌第76巻1号 日本考古学会
- 日下和寿 2000「気仙郡住田町小松洞窟発掘調査報告書」岩手県立博物館調査研究報告書 第16冊 岩手県立博物館
- 小林達雄編 2008「総覧 縄文土器」『総覧 縄文土器』刊行委員会
- 神原雄一郎ほか 2009「盛岡の縄文時代草創期～早期の土器文化【資料集】」盛岡市遺跡の学び館
- 星 雅之 2011「子割沢Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第583集 (財)岩手県文化振興事業団

写 真 图 版



調査区全景1（北より）



調査区全景2（東より）

第2 図版



RE 001 豎穴跡



RD 001 土坑



RD 002 土坑



RD 501・004 土坑

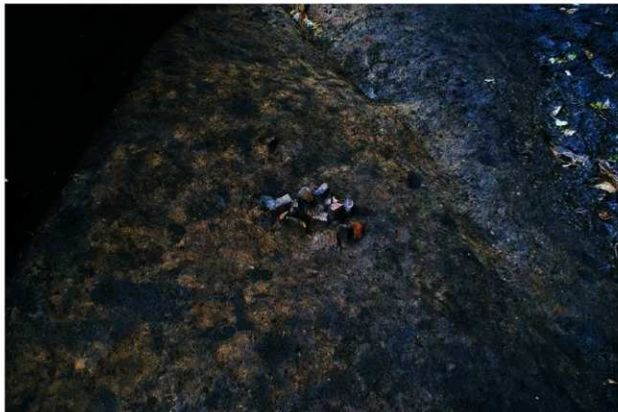
第4図版



遺物包含層堆積状況



遺物包含層土器出土状況 1



遺物包含層土器出土状況2



遺物包含層土器出土状況3

第6 図版



旧河道跡 1



旧河道跡 2



遺物包含層出土土器1 (表)



遺物包含層出土土器1 (裏)

第8 図版



遺物包含層出土土器2 (表)



遺物包含層出土土器2 (裏)



遺物包含層出土土器3 (表)



遺物包含層出土土器3 (裏)

第 10 図版



遺物包含層出土土器 4



遺物包含層出土土器 5



遺物包含層出土土器 6



遺物包含層出土土器 7

第 12 図版



遺物包含層出土器 8



遺物包含層出土石器 1



遺物包含層出土石器 2



遺物包含層出土石器 3

第 14 図版



旧河道跡出土土器 1 (表)



旧河道跡出土土器 1 (裏)



旧河道跡出土土器 2 (表)



旧河道跡出土土器 2 (裏：上段 2 列)

第 16 図版



旧河道跡出土土器 3



旧河道跡出土石器

報告書抄録

ふりがな	おおやちいせき							
書名	大谷地遺跡							
副書名	市道二子沢線改良工事に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ番号								
編著者名	佐々木亮二、鈴木俊輝							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 TEL019-635-6600 Fax019-635-6605							
発行機関	盛岡市教育委員会							
発行年月日	2018年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 世界測地系	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおやちいせき 大谷地遺跡	もりおか したまやまあげ 盛岡市玉山字 大ニ子	03201	KE67- 0354	39° 50' 06"	141° 11' 56"	2016.08.1～ 2016.11.16. 2017.10.0～ 2017.11.07	10326	市道改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大谷地遺跡 第2次	散布地	縄文時代	竪穴跡 1基		縄文土器、石器			
			焼土 1基					
			土坑 3基					
			陥し穴状土坑 2基					
		古代	遺物包含層					
陥し穴状土坑 1基								
		ピット 1口						
要約	大谷地遺跡は、縄文時代の遺跡として周知されている。開田工事の際に多くの遺物が出土したとされ、竪穴建物跡等の生活の痕跡を示す遺構の存在が予想されていた。本調査では、竪穴跡や陥し穴状土坑、遺物包含層が確認され、縄文時代早期末葉の表裏縄文土器や、石器等が出土した。							

大谷地遺跡

—市道二子沢線改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—
2018年3月28日 発行

編 集 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 盛岡市本宮字荒屋13番地1
℡019-635-6600

発 行 盛岡市・盛岡市教育委員会

印 刷 株式会社 杜陵印刷
〒020-0122 盛岡市みたけ2丁目22-50
℡019-641-8000
